

[退職のご挨拶]

退職にあたって

東北大学サイバーサイエンスセンター先端情報技術研究部 吉澤 誠

新型コロナウイルス感染症は、世界中の人々の心身の健康に非常に大きな脅威を与えています。この原稿を書いているときも、専門家の見解では第4波が始まったのではないかという報道がありました。

ふつう、長年勤めてきた職場で無事定年退職を迎えられることは大変喜ばしいことなのですが、昨年退職された方々に引き続き、今回もまたコロナのために、お祝い事はことごとく中止になってしまいました。

私以上に残念な思いをしたのは、研究室で指導してきた学生たちでしょう。卒業・修了に際してのさまざまな式やイベントはもちろん、楽しみにしていた卒業旅行などもできず、大変不遇な年に遭遇してしまい、不憫でなりません。

10年前の東日本大震災でも、同じようなことが起きました。夥しい数の方々が亡くなり、原発事故で東日本が壊滅するのではないかという強い不安に苛まれた当時と比べると、あの時と同様に世界中で多くの人々が亡くなっているのですが、身近で目に見える形でのダメージはあまり感じられません。

しかし、震災後で多用された「絆」という言葉の代わりに、「ソーシャル・ディスタンス」が叫ばれて、行き交う他人がすべてウィルスまみれのゾンビのように見えるようになってきました。大学では新入生のための寝食ともにするような新歓イベントもなくなり、新しい人間関係構築の機会が減っています。

このような、これまで人間が自然に求めてきた、唾を浴び口臭が匂うくらいまで人と人とが物理的に近接し、肌が触れ合うような社会的交流の機会が失われたことの影響は、コロナが明けた後も、かなり長くじんわりと根強く続くような気がします。もしかすると、ここ数年は人口統計には表れないような精神的な「丙午」の年となるかもしれません。

大震災の後は、「復興」が社会全体と大学の目標でした。当時、壊れたインフラを修復することが、まず第一であり、連休明けまで大学は実質的に休みでした。崩壊寸前だった建物の中にあった私の研究室も、一旦、サイバーサイエンスセンターに避難し、その後、仮設プレハブ棟に移り、さらに新築していただいた建物に引っ越して、ようやく元の研究環境が整いました。とにかく元に戻すことが重要でした。

一方コロナ禍では、元の環境に戻すことではなく、オンラインで教育・研究・業務が実質的に実行できる代替環境を、できるだけ早く新たに構築することが目標となりました。このために多大な労力と貴重な時間を費やしてご努力された情報シナジー機構やサイバーサイエンスセンターの関係者には深く感謝し、敬意を表します。

これは震災前とは異なり、スマートフォンが震災後に急速に普及したような高度な情報通信環境の進展がなければ実現できなかったことだと思います。私も、定年退職の年になって初めて、オンライン講義のコンテンツ作りに忙殺されました。ようやく動画やアニメーションで工夫をこらしたコンテンツができて、講義の初めのころは講義する教員側も受講する学生側も不慣れなため、なかなかうまく行きませんでした。

さらに厄介だったのは、オンラインで試験ができるかどうかということでした。対面での試験を一切行わず、すべてをレポートで評価することとしまえば、これほど簡単で安直なことはありません。しかし、大学教育者としての沽券にかけて、何かと様々な工夫をすることによって前期科目のオンライン試験を4クラス並行して実施しました。ただし結論から言うと、不正行為が100%ないオンライン試験は不可能だということもわかりました。これについては、「オンライン試験なんて本当にできるの？ —システム制御工学Aの場合」（第2回東北大学オンライン授業シンポジウム，2020年9月17日，<https://drive.google.com/file/d/19ui6PDVwM9iu06yPTWkgLC5U7hfL0zxf/view?usp=sharing>）で発表しています。

普通このような原稿の場合、定年退職にあたってこれまで奉職してきた38年間で振り返り、その間の様々なことを述べるべきだったとは思いますが、定年退職の年の災禍が少なからず精神的にシビアだったため、ほとんどこの1年余りの出来事で感じたことを述べてしまいました。本当は頭の中でぐるぐる回る走馬灯の内容でも、もう少しお話したかったのですが、立ち去る者が美しく見えるように、ここで筆を置きます。

これまでお世話になりましたすべての皆様に感謝いたしつつ、コロナに負けないで健やかに過ごして下さるようお祈り申し上げます。

執筆者所属は2021年3月までの名称を記載しました。

現職：東北大学産学連携機構 イノベーション戦略推進センター 特任教授・名誉教授